

働くことの意味——仕事観の転換

大庭 健
Written by Takeshi Oba

何のために働くのだろう？ こう問うと、

「生活していくためだ」という正解が待ち構えている。この圧倒的な正解は、ときとしては「なんで分かってきていることを、したり顔で問うのだ？」という威圧的な響きさえをもつ。とりわけ失職し路頭に放り出された人々、低賃金の単純労働でなんとか食いつなぐしかない人々においては、とりわけ、そうであろうし、そうした苛立ちには十分な理由がある。しかし、そうした人々も、かつて安定した職業生活を送っていたところに、何かのおりにふと「そもそも何のために働くのだろう？」と呟きの自問を発したことがあるはずだし、あるいはこの先、快適な職場で働くようになった後でも、なお自問しうる。

そう自問するときには、「生活費を得るため

だ」というだけでは答えにならない何かが問

われている。仮に「働くのは、生活費を得るためだけだ」としよう。その場合には、働くことは、生活費を得るための手段にすぎず、働かなくても生活費が得られるなら、なにも無理して働く必要はない、ということになる。ところが、じつさいに、そうはならない。つい先日、TVで大阪のドヤ街の様子が放映されていたが、失業した60歳の日雇い労働のおっちゃん「同じ酒を飲むのでも、（公的扶助のよ）うに」世間の世話になるのではなく、自分で稼いだ金で飲むほうがいいに決まっている」と語り、仕事がない辛さを語っていた。このおっちゃんの感じ方は、ドヤ街の住人のあいだで、例外的だとは思えない。働くことのうちには、たんに生活費を得る手段だということ

には尽きないものがある。

*

私たちは、「何のために働くのだろう？」という問いと無縁でいることはできない。というのも、やや大上段に振りかぶって言えば、私たち人間は、自分のしていることの意味を問わざるを得ない生き物だからであり、「何のために」という問いは、意味への問いだから、である。

ギリシャ神話に出てくるシジフォスは神々にそむいたゆえに、その罰として、毎日大きな岩を丘の頂に運び上げる労役を課された。ところが、この岩は、頂にすえられると直ちに転がり始め、もとの麓に落ちてしまう。したがっ



てシジフォスは、来る日も来る日も、大きな岩を運び上げては、麓に駆け降りてまた運び上げる、という労役を繰り返さねばならない。この刑罰が非人間的なのは、労役がきついからだけではない。もちろん、それもあるけれども、しかし一番の問題は、その労役に全く何の意味もない、ということにある。動物は、自分のしていることの意味について考えたり悩ん

だりはしない。しかし、人間は、そうではない。自分が一生懸命やっていることが、じつは全く無意味である、ということは、人間にとって大変に辛いのである。

そして「何のために働くのだろう」という問いは、働くことの「意味」への問いである。ところが、この問いが「何のために」という言葉で表現されるとき、意味への問いは、しばしば気づかぬうちに「何を実現するために役立つのか」という「手段としての有用性」への問いにすりかえられてしまう。

このすりかえの代価は、大きい。「意味」への問いが、「手段としての有用性」への問いに変質してしまうなら、そのときには、私たちの思考は、「何らかの目的を実現する手段として有用でなければ、無意味だ」という図式に支配されてしまう。この図式は、なるほど一見合理的に響く。というのも、何かを実現する「手段として有用」だからこそ「意味がある」というのだから。しかし、このように理解された合理性こそが、一番問題なのである。

＊

糞尿をおむつに垂れ流し、空腹になると泣き出すだけの乳児の面倒をみると、あなたは、そのように面倒をみる意味を感じている（そうでなければ、やってられまい）。では、そうする意味を感じたのは、「乳児の面倒をみる」ことが、何かを実現する手段として「有用だ」と計算できたから、なのか。もちろん、そうし

た打算が全くないわけではないかもしれない。たとえば、「手のかかる子供の面倒をみている、いい親だ、という評判を得るために」とか、「いづれ、この子が私たちの老後を支えてくれるために」とかいった計算は、あるのかもしれない。しかし、そうした合理的な計算だけで、あなたは、乳児のおむつを脱がして糞をぬぐっているのだろうか。そうではあるまい。

このことは、働く「意味」についても同様である。たしかに、働くことの「手段的な有用性」にかんする計算は、無視できない。だからこそ、「生活費を得るための手段として有用・不可欠だ」という答えが威力をもつ。しかし、意味についての話は、手段としての有用性の話に収まり切らない。このことは、目的が「生活費」でなく、たとえば「自己実現」と置き換えられたとしても、同様である。「意味」は、「手段としての有用性」に回収しきれないのである。

＊

「意味」のある活動は、それだけで私たちに「する喜び」・「やりがい」を与えてくれる。ところが、意味が「手段としての有用性」にすりかえられてしまうと、活動が意味をもちうるのは、ただひとえに、活動によって、その結果として得られるものが価値をもつときにかぎられる。そして、結果として価値あるものが手に入る場合でも、活動そのものには何の価値もなく、活動することの喜びもない。喜びや価値は、もはや活動そのものの「うち」にはなく、

その後には、つまり活動の「外」にしか存在しない、ということになる。こうなると活動そのものは、たんに「労苦でしかない」。

労働にかんしても、こうした見方は少なくなかった。古代では、「地域・国家の政治に携わることのみが価値をもつのであって、労働は、政治に携わる余裕をうるための手段にすぎず、労働そのものは、むしろ奴隷・農奴の活動と同じだ」という考えが支配的であった。近代以降では、「余暇を満喫することこそが価値をもつのであって、労働は、余暇を得るために支払わねばならない代償にすぎず、労働そのものは、たんに「労苦でしかない」という労働観も珍しくはない。

育児にかんしても、同様である。意味が「手段としての有用性」にすりかえられてしまうなら、おむつを取り替え・ミルクを飲ませる活動も、その結果として後に得られるものの価値をもつとき、そのときにかぎって、手段としての有用性をもちうるにすぎず、育児そのものは、たんなる「労苦でしかない」ということになる。

*

このように、〈意味〉への問いが、〈手段としての有用性〉への問いへとすりかえられてしまふなら、働くことの価値も、その喜びも、見えなくなってしまう。これは、きわめて視野の狭い、偏ったものの見方である。

では、〈手段としての有用性〉には回収でき

ない、働くことの本来の意味は、どこにあるのだろうか。これを考えるさいの鍵は、「そもそも働くということは、何を意味しているか」というところにある。

仕事をもつて働くということは、第一に、「他人が生きていくのに必要とするものを提供する」ことを意味する。この点で、仕事と趣味は、決定的に異なる。仕事も趣味も、ものや情報を産出する活動だ、という点では同じである。しかし、趣味は、自分の欲求を満たす活動にすぎないが、仕事はそうではない。仕事は、あくまで、他人が必要とするものを提供する活動なのである。

第二に、私たちは、仕事をとおして、ものやサービスを他人に提供するとき、こうした提供は、贈与のように一方的になされるのではない。つまり、仕事をもつて働くということとは、「誰もが生きていくのに必要とするものを、たがいに提供しあう」ということを意味する。この点で仕事は、奉仕や贈与とは違う。贈与や奉仕は、あくまで一方通行であって、そこには「おたがい」という互酬性はない。たしかに、どの時代でも、無償の奉仕や贈与は、重要である。しかし「ボランティア」という語の魔力によって、仕事として働くことと、無償で奉仕することの違いが曖昧にされてはならない。

*

このように、仕事をもつて働くということ



は、
「誰もが生きていくのに必要とするものを、たがいに提供しあうネットワークに、参加する」

ということを意味する。そして働くことの意味も、このネットワークの網目を織り成すというところにある。

そもそも人間は、ひとりでは生きていけない。ひとりでは無人島で暮らしたロビンソン・クルーソーも、難破した船の倉庫のなかに多く



の他人が作ってくれたものを貯蔵してあったからこそ、しばらく生活を続けられたというにすぎない。私たち人間の生活は、動物とは違って、日々の衣食住のほぼすべてにわたって、おたがいに、他人の仕事の成果に依存している。人間とは、分業を織り成して、たがいに他人の活動に依存しあうことによって生きる生物なのである。ひとりで仕事をしているときにも、それが仕事であるかぎり、その孤独な作業も、すでに分業の網目のひとつとな

っており、そこで綻びるならば、ネットワーク全体にほつれが生じる。
そして、このように相互に依存しあう働きのネットワークに加わるのは、たんに自分ひとりの生存を維持するためだけではない。おむつを取り替え、ミルクを与えて次の世代を育てるといふ、生命の連鎖もまた、相互に依存しあう仕事のネットワークのうえではじめて可能となる。

*

仕事をもって働くということは、すなわち、相互に依存しあう働きのネットワークの網目のひとつを形成し、生命の連鎖を担うことを意味する。働くことが「すなわち」ネットワークの網目の形成なのであって、働いた

後に、その結果として網目ができるのではない。

仕事をもって働けるということは、自分もそうした網目のひとつを形成しているということが、社会的にも承認されることに他ならない。縮めて言えば、働くということは、たがいに依存しあった、各自の社会的な存在を認めあうこと（社会的な存在の相互承認）の具体的な姿なのである。だからこそ、働けないということは、辛いのだ。

CEL

■大庭健（おおば・たけし）

専修大学文学部教授、倫理学者・哲学者。1946年埼玉生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。主な著書は、『はじめての分析哲学（産業図書）』、『私という迷宮（専修大学出版局）』、『責任 について』（講談社現代新書）、『所有という神話―市場経済の倫理学』（岩波書店）、『善と悪』（岩波新書）、『いま、働くといふこと』（筑摩書房）など。